

「リアルタイムのつながり」 佐佐木定綱

「心の花」のツイッター担当になり、あらためてネットについて考えるようになった。

インターネットが普及し、フェイスブックやツイッターなどのSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）ができたことにより、個人からの発信、結社や団体からの発信は容易になった。短歌は短い形式のため、小説や散文詩などよりもさらに発信しやすいように思える。ツイッターのような短文のみしか投稿できないものでも、短歌を呟くことは容易だ。

事実、ツイッターで検索してみると多くの歌が見受けられる。ツイッターは基本的にどんどんと新しい投稿に押し流されていくため、しっかりと歌を「残す」ということは難しいように思うが、一つのツールとして強力であると思う。

また、リアルタイムというのも一つのキーワードであるようだ。KADOKAWAが学生短歌会に働きかけて行われた「学生短歌バトル 2015 学生短歌会対抗 超歌合」はニコニコ生放送というネットの生放送で配信された。詳しくは角川「短歌」五月号、田中濯の「フラットに、フェアに」に書かれている。

イベントの様子はネットで配信され、二千人もの人が視聴たとされる。コメントを投稿すると画面に表示され、ほかの視聴者や出演者の方でも確認が出来る。つまり、ある程度の双方向性が

存在しているのである。田中はリアルタイムで見せることによる判定のフェアさについて述べている。ネット配信のために開催地域との距離の問題は解消され、「地域格差はまことにフラットになる」とし、また、常に誰かが視聴しており、見返すことも可能な点から「判者や、あるいは選者・審査員といった人々が、その場限りの仕事をすることや、妥当性を欠いた判断を行うことに、大きな制限がかかり、結果として、よりフェアにならざるを得ない」ことが「最大の財産なのではないか」としている。

リアルタイムで視聴でき、コメントを投稿することで、ある程度の双方向性も存在していることはメリットでもありデメリットでもある。その場のコメントが効力を持つため、ライブ感の共有ができる、一方瞬発力のみが力を発揮することも意味する。

ツイッターはタイムラインで管理され、更新ボタンを押す度に誰かが呟いたものが瞬時に並ぶようになっていく。フォローしている数にもよるが、秒単位で次々に新しい投稿が表示されていく。数秒前の呟きは押し流され、過去となっていく。今が加速してゆくような錯覚に陥る。その中で注目を浴びようとするよりも過激だったり衝動的だったりはなくてはならない。

情報のやりとりはタイムラグがなくなり、徹底的に「いま」が重視されているように思う。リアルタイムに発信し、共有することで初めて「いま」の認識にいたつていような逆説的な感覚もある。若者に現実感がないと言われることがあるが、常に現在を発信して他人の今とつながりながら、ネットとリアルで多重的に「いま」を感じているからそうなるのかもかもしれない。それが短歌にどのような変化をもたらすのか、注視していきたい。